

企業参加型教育支援プラットフォーム 「こども未来クラブ」の取組 (その4)

年度末もすぐそこまで迫ってきており、教育や行政の現場では、一年のまとめを行う季節がやってきました。子供を育てるといふ営みは、木が年輪を形成していくように地道に一つ一つ歩みを進めていくことと同じです。年度末のこの時期は、1年の節目として子供の成長を振り返る格好の時期だといえます。

今年度最後となる4回目の本連載においても、企業参加の取組が子供たちをどのように育てているのか、この一年間の「こども未来クラブ」の取組を振り返りながら考えてみたいと思います。

今号では、「こども未来クラブ」の取組に1年を通じて御参加して下さった三鷹市立第一小学校とその児童に焦点を当てて考えてみたいと思います。

本年度、三鷹市立第一小学校においては、「GIJ(ジェネラル・イメージング・ジャパン)」との連携による「映像」事業、株式会社リコーとの連携による「接写型プロジェクター活用学習支援」事業、株式会社凸版印刷との連携による「パンフレットとプレゼン学習支援」事業、東京学芸大学と連携した「タブレット端末活用学習支援」事業等が、「こども未来クラブ」の取組として展開されました。

下にある児童の手紙は、この中の株式会社凸版印刷との連携による「パンフレットとプレゼン学習支援」授業の後に書かれたものです。この授業は凸版印刷と連携し、児童はグループを作り、社会科見学を通じて魅力的だと感じたところを、パンフレットのコンセプトづくりや構成を考え、その内容をクラス全員の前でプレゼンするもので5年生を対象に実施されました。

「パンフレットとプレゼン学習支援」事業の流れ

- **オリエンテーション** 顔合わせ、凸版印刷の紹介、課題出し
- **授業(1)** 導入、制作コンセプト作り、制作作業、掃除、まとめ
- **授業(2)** 作品の確認、プレゼンテーション内容の作成、リハーサル
- **授業(3)** 発表会説明、発表準備、リハーサル、発表

授業はグループ学習を基本として進めていきますが、凸版印刷の社員の方が1グループにつき1人ずつ入り、子供たちに寄り添って学びの支援をしていきます。

この児童の手紙には、こうした社員の皆さんとの交流による「学び」に対する、素朴だけれども大変大きな喜びの一端が表されています。

また、2つ目の手紙では、この授業で得た経験が、後に学校で取り組まれたアントレプレナーシップ*での「三鷹の銀杏を広めよう(銀杏売り)」の取組に大きく生かされたことがわかります。この取組は三鷹の特産の銀杏を地域の方に広めるために、地域の方が生産した銀杏を仕入れ、価格・場所・方法を児童自身が考え、販売するという内容で行われました。「パンフレットづくり」とは直接関係のない取組ですが、ある物を誰かに紹介する(勧める)という点で共通しています。

子供たちにとって、企業の社員などの学校外部の人たちと関わることは、そのことだけでも新鮮で刺激があり、魅力的なこと

でしょう。手紙の中の子供たちの反応は、そんな「目新しさ」に対し反応しているという側面もあると思います。

一方でしっかりと捉えておきたいことは、そんな外部の方との交流により「学ぶ」ということの持つ本質的な楽しさに児童が気づき始めているということです。

学校での「学び」は、多くの場合「勉強」という形で子供たちの前に現れます。勉強というものは、「勉強」「強いる」と書くように、ある意味、強制的でやらねばならないものというプレッシャーを伴うものでもあるわけです。例えば、国会の仕組みを社会科で学んでも、実際に自分の生活の中でそれを生かす場面はなかなかありません。つまり、学んだことが現在の自分にとっては関係のないこととして感じられてしまう場合が多いということです。こうなると子供たちは学ぶことを、「成績」という形で自分を判定する道具、あるいは受験等でのみ必要となる試練として感じる(これこそまさに勉強、強いる)ことになります。そして、勉強は、「成績のため」「受験のため」に行うものだという感覚になってしまうのです。

しかし、知らない人に出会い、知らないことに出会い、「なるほど」とか「こうすればいいんだ」ということが「わかったり」、「できたり」する体験は、本来楽しいものです。

このことこそ「学び」の本質的な楽しさなのです。その様子が先の児童の手紙の中から感じられます。パンフレットの作り方やプレゼンテーションの行い方を企業の方に教わり、その本質のようなものを理解し、次の活動に活かすことができたという喜び。「知らないことがわかった」という純粋な「学び」への喜びが表現されているように感じます。

加えて、こうした企業の方々との授業では、「失敗しても大丈夫」という感覚を子供たちの中に引き起こしているということです。1つ目の児童の手紙には、自分の当初の作品が「ダメダメ」であったことが書かれています。しかし、その「ダメダメ」という本来であればマイナス材料となるような事象が、企業の方々のかかわりにより、「イイ」ものに変容しています。企業の支援は、子供たちにとって、失敗から課題を見つけ、作品を共に作り上げていく「味方」や「相棒」のようなものだったのです。

近年の子供たちは、失敗を極度に恐れています。だからこそ「子供らしさ」がなかなかみえてきません。現実に生きていく上では、「答え」のある事象の方が少ない場合が多く、数多くの「失敗」を繰り返す中で、いかに最も「正解」らしいものに近づいていくか。そのプロセスが社会に出て、大人になって大切になってくるのではないのでしょうか。そういった意味では企業で働き、日々「答え」のない課題に向き合っている社員の存在は、生徒の「失敗」に対しても、「じゃあどうすればよくなるかな」と問いかね、共に考えるということ、自然に行うことができるのではないのでしょうか。

子供たちが純粋な「学び」に対する喜びを知り自発的に学び、失敗を恐れない勇気を持って未来を創造していくことを、これからの子供たちに期待したいと思います。子供らしさが、学校外部の方々との交流や連携の中でより子供たちに発揮されること、この点こそが、私たちが企業参加の取組の意義、「こども未来クラブ」の取組の意義の一つであると強く感じているところです。

今後も、学校と企業が繋がることで広がる、子供たちの「学び」の世界を、継続的に、そして力強く作り続けていきたいと思っています。

御参画いただける学校や企業を随時募集しておりますので、御関心や御質問等がありましたら、NPO法人東京学芸大こども未来研究所(042-329-7795)まで是非御一報くだされば幸いです。

(この記事は、東京学芸大学教授の松田恵示先生のインタビューをもとに、東京都教育庁地域教育支援部生涯学習課で編集・再構成したものです。)

*アントレプレナーシップ
高い意欲を持ち工夫を凝らして理想を現実に変えていこうとする「起業家精神」のこと。三鷹市立第一小学校は、「アントレプレナーシップ」教育に力を入れており、「三鷹の銀杏を広めよう(銀杏売り)」の取組は、その具体的な活動の一つ。

